View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

〈 2. 特集　行く・読む 〉

時代診断の擬似否定

鈴木洋仁『「平成」論』
（青弓社、2014 年）

笹部　建

本書はタイトル通り「平成」という元号をめぐっての時代イメージを論じた著作であり、著者の学位論文（「元号の歴史社会学」2012 年度東京大学学際情報学府）をもとに書かれている。本書に限らず、評論やマスメディアの中にも現代社会がどういった時代であるかを、大きな視野から論じたものは多い。けれども本書の結論は異様である。「平成」という時代は特定のイメージでまとめがたい、そして、むしろそのまとめがたさこそが「平成」の特徴である、というのだから。以下では本書の議論を追いつつ、その意味を探っていきたい。

本書は 7 つの章で構成されている。序章（「『平成』論」とは何か）では時代区分が消失した時代として「平成」が定義され、1 章〜終章までの概略が述べられる。「平成」という時代は始まった当初は明るくイメージされていたが、四半世紀を過ぎる頃には暗くなっていった、ように見える。だがその原因と思われる経済の動きに対しては、「バブル崩壊以後」や「平成不況」や「失われた十年」といった標語が、互いに微妙にズレ合いながらもその期間を先延ばされ続け、一向に明確な像を結ばない（1 章）。区分の話は経済にとどまらず、「平成」を歴史的に語ろうとする言論のことごとくが、事例や現象を共通項なく並べ立て、統一感を欠いたまま集積する（2 章）。ことばの芸術性や商品性を担う文学の領域でも、「明治文学」や「昭和文学」に比して、「平成文学」は論じられるどころか単語として流布しておらず、どのジャンルのどの作家のどの作品もその代表とみなされない（3 章）。そしてこれらのことばの運動の軌跡が、「いかにも『平成的』である」とされる。

言説の散逸過程を追尾していく前半部の記述とは異なり、後半部からは記述の中に著者本人も登場してくる。社会的なできごとを扱うニュースは「平成」に入ってから、できごとの事実性に加え当事者以外がその是非を問う、強い負荷がかかるようになる。著者はテレビ局に勤務していた経験を振り返りながら、その様子を「責任と正義」と呼び「ツマラナイ」としながらも、その説教臭さの背後にある、ニュースそれ自体を求める欲望を指摘し、両者の貼り合わせに「『平成的』な面白さ」（本書 : 172）があるという（4 章）。また、本書自身もその一部として位置づけられる「批評」の領域において、「平成」では自己の権威への信憑性が失われた批評＝「レビュー」が跋扈し、自己批評に自己批評を重ねるような「メタメタ批評」が現れたとされる（5 章）。そして終章では再び自身の経験に触れつつ、本書の社会学的な意義を『フラット・カルチャー』（遠藤知巳編、2010 年、せりか書房）から受け継ぐものとして位置づけ、「平成」という時代をめぐって自由に論じることの意義が強調される。

以上のような構成の本書に対し、評者の読後感は奇妙なものだった。反復強迫めいた「いかにも『平成的』である」という断言は一見無意味のようで、そこには何かそうとしか書け

ないような、ある切実なものが込められているようにも思える。その意味で本書を「若者らしい生真面目さ」に溢れているとする本郷和人に評者も共感する[1]。また、現代社会における言説の散逸を記述していく本書は、（直接参照されてはいないが）蓮實重彦『物語批判序説』（1985 年、中央公論社）に近接しているが、ことばの「浅さ」と戯れる Barthes の実践を肯定する蓮實の記述とは、どこかで決定的に異なっている。

本書と非常に対照的なものとして評者が想起するのは、2014 年に NHK 教育テレビで放送された番組『ニッポン戦後サブカルチャー史』である。劇作家の宮沢章夫が日本のサブカルチャーの歴史を 10 回に分けた講義形式で振り返るという番組で、宮沢は日本でサブカルチャーが誕生したのは 1956 年とした上で、（たまたま宮沢自身も 1956 年生まれであることを明かしつつ）自身の経験とサブカルチャーの隆盛を戦後史のトピックへ接続していく[2]。

評者にとって興味深いのは、この番組がサブカルチャーという定義上独立ではあり得ない諸々の文化的事象を、宮沢章夫という一個人の語りに継ぎ接ぎしている点である。全体を語りきれないことが分かっているからこそ、個人の局所的な語りに安住できるという、フラットな形式が見事に整っている点で、著者のことばを借りるなら「いかにも『平成的』」な番組と言えるだろう。このように、語り手自身の限定的な立場が、語られる内容の全体性を疑似的に担保させるあり方に対し、本書の戦略はその真逆を行く。著者は「書き手のみっともなさをさらけ出す姿勢」（本書 : 17）によって、語る内容の限定性を徹底化する。つまり「『平成』が『ない』という説から、どんな話が展開できるかの実践」（本書 : 12）をしつこく書き連ねることで、「平成」の時代診断の可能性を疑似的に否定し、記述の妥当性を限界づけるのである。宮沢の「講義」は、サブカルチャーとは何かを分かった気にさせてくれる点で、本書の記述は「平成」とは何なのか、ほとんど分からないことだけが分かるという点で、両者は対照的でありながら共に優れたコンテンツとなっている。

また、評者はかつてメディア上を席巻する昭和に対するノスタルジーについての著作をとりあげ、過去を語りたがる心性よりも、過去を中途半端にしか表象できないことの方が重要ではないか、と指摘した[3]。本書の関心に沿った形でこれを言い換えるなら、「平成」という時代が明確にイメージできない時代であるからこそ、そこでは「昭和」が過剰に語られ、また過剰に語られつつもその語られ方はどこか中途半端に留まる、ということなのだろう。曖昧なイメージだからこそ饒舌に語られ、また饒舌に語られるがゆえにイメージは曖昧なまま集積する。さらにその循環が可能なのは、現代がまさしく「平成」という、曖昧でこと

1 『朝日新聞』2014 年 7 月 6 日の書評欄。

2 ただ、番組自体のコンセプトと宮沢の語りは必ずしも一致していない。たとえばサブカルチャーの起源が 1956 年なのであれば、わざわざ「サブカルチャー史」の前に「戦後」と付ける番組名は冗長だろう。また番組終了後すぐに刊行された同名書籍は、総ページ数の半分以上を巻末の関連年表が占めており、味もそっけもない暗記事項の前に宮沢の語りが貼り合わされるという、見様によってはかなり変則的な体裁となっている（宮沢章夫・NHK「ニッポン戦後サブカルチャー史」制作班編、2014『NHK ニッポン戦後サブカルチャー史』NHK 出版）。

3 笹部建、2012「書評論文　ノスタルジーの文化社会学」（浅岡隆裕 2011『メディア表象の文化社会学』ハーベスト社）『KG 社会学批評』第 2 号、11-9。

ばだけが空回りする時代であるからで、本書の記述はこのような循環の重層性を顕在化させる。過去を美化して「時代の空気」なるものを呼び出すのでもなく、また逆に現代をあたかも歴史の分水嶺のように描くのでもない、現代社会論が現代社会に対して持つ批評的距離の設え方を、評者は本書から学び取ることができたように思う。

ただ、疑問点もある。本書では結論部において「再帰性、つまり、自らの議論をそれ自身で検証する性格において、本書は社会学だと自らを位置づけている。」と書かれている（本書:210）。けれども著者がここで述べている「再帰性」というのは、何も社会学だけでなく近代以降の社会一般によく見られるものである。「信頼回復」のための自社の取り組みを報道する朝日新聞のニュースや、作品自体の中で「文学」を語る高橋源一郎の『日本文学盛衰史』のような文学作品は「再帰性」があると言えそうだが、別に社会学ではない。本書のもとになっている論文が「元号の歴史社会学」とある以上、元号に関することばの歴史の積み重ねを分析する手法が社会学的であるということなのかと推論できるが、そうなっているのは本書の 3 章の「文学」を扱った箇所だけのように読めた。

さらに言えば、仮に「自らの議論をそれ自身で検証する性格」として本書を社会学だと位置づけるのであれば、どこかで「『平成的』な社会学」について積極的に論じる必要があったのではないだろうか。『フラット・カルチャー』では佐藤俊樹がマスメディアで流通する「社会学」とアカデミズム内部の社会学を区別した上で、社会の中で両者が実質的には乖離していきつつも区別なく語られていくさまに現代のフラットさを見ている（佐藤俊樹「背中合わせの共依存　あるいは『殻の中の幽霊（ゴースト・イン・ザ・シェル）』」）。似たようなかたちで、本書も社会学的な議論を「平成的」なかたちで検証するという章があれば、（社会学的にしろ、「平成的」にしろ）より面白くなったと思われる。もともと遠藤も佐藤も共に歴史的射程の大きな著作を持つ社会学者である[4]。著者も今後は本書のようなアクチュアルな議論に加え、広大な射程を持つ議論を展開していくことを待ち望みたい。

4　遠藤知巳，2000，「情念と身体：17 世紀西欧の記号空間」『関西学院大学社会学研究科紀要』84 号 27-37、佐藤俊樹，1993，「個人と法人の資本主義――企業組織の歴史社会学」『組織科学』（27）1, 35-46 など。